

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の2年目)

1. 研究課題

芸術と社会—近代における創造活動の諸相—

Art and Society: The Various Aspects of Creative Activities in the Modern Age

2. 研究代表者氏名

高階絵里加

Takashina Erika

3. 研究期間

2020年4月-2023年3月(2年目)

4. 研究目的

芸術を歴史・文化・社会との関連からより多角的に考察する研究は近年活発化しており、たとえば美術の分野においては、作家・作品研究を基本として、さまざまな芸術運動、都市文化や生活文化との関わり、美術市場の変化、パトロンの変遷、文化支援、ジャーナリズムと批評の発達、広告と美術、展示空間の多様化、博物館・美術館活動のひろがり、美術受容者の研究等、多様な方法が試みられている。本研究会もその一翼を担うものとして、美術を中心に、歴史、文学、映像、デザイン等の分野の研究者にも加わっていただき、広い意味での近代における芸術作品・芸術家と社会の多様な結びつきの一端を明らかにすることをめざす。基本的には、具体的な作品や資料、あるいは作家や出来事を素材として、社会の中での芸術の諸相を考えたい。場合により研究会の場を美術館や博物館に移し、展示や展覧の場をフィールドとする研究会も行いたいと考えている。

In recent years, there has been a growing amount of research to examine art from a more multifaceted perspective by looking into its connection with history, culture, and the society. For example, while conducting research on artists and artworks is fundamental to the field of art, a variety of other approaches to the subject are also being examined, such as, various art movements, urban and lifestyle culture, the shifts in the art market, changing patrons, cultural support, development of journalism and critiques, advertisement and art, diversification of exhibition spaces, widening activities at museums and art galleries, as well as research on recipients of art. This joint research project will contribute towards this effort by inviting researchers from other fields catering to art, such as that of history, literature, film, and design to participate in workshops which attempt to

clarify, in a broad sense, the various segments of connections that artworks and artists have with our society in the modern age. Essentially, we would like to explore the various aspects of art in the society by examining specific works and materials, or perhaps the artists and events. Depending on the situation, these meetings will be conducted at an art gallery or museum and make the area where displays and exhibits are held as the place of study.

5. 本年度の研究実施状況

三年計画の第二年目である本年は、計 10 回の研究会を開催した。第一回研究会は 4 月 10 日（土）に開催、高階秀爾氏により「アウラの嘘と夢—W.ベンヤミンの『複製技術時代の芸術作品』をめぐって」と題し、W.ベンヤミンの概念「アウラ」と「芸術と社会」との関係をめぐる発表が行われた。第二回研究会は 5 月 29 日（土）に開催、芸術と「分解」の概念をテーマとして、藤原辰史による発表「「捨てられたもの」の芸術について」が行われた。第三回研究会は 6 月 24 日（土）に開催、藤本真名美氏による発表「近代京都の歴史画家・谷口香嶋について」が行われ、これまであまり注目されなかった京都近代の歴史画家についての新しい知見が発表された。第四回研究会は 7 月 24 日（土）に、板橋区立美術館及び京都文化博物館で開催中の展覧会「さまよえる絵筆」に関連して「東京・京都 戦時下の前衛画家について」と題する発表が行われた。第五回研究会は 9 月 11 日（土）に池田さなえ氏により、「京都美術工芸界を支えた人びと—ノードとしての品川弥二郎」と題し、政治家として知られる品川弥二郎の芸術支援とそのネットワークに関する発表が行われた。第六回研究会は 10 月 16 日（土）に、竹内幸絵氏により、明治から昭和にかけて画家・デザイナーとして広告の分野で活躍した杉浦非水に関する発表「杉浦非水論 大正から昭和初期の発言と作品をもとに」が行われた。第七回は 11 月 13 日（土）に、松原史氏により京都を中心とする近代刺繡産業に焦点を当てた発表「社会を写す近代の刺繡～作品から見る刺繡の新たな展開～」が行われた。第八回は 12 月 18 日（土）に、小川佐和子氏により「オペレッタにおける社会諷刺—ハプスブルク帝国期から戦間期の作品をみるー」と題し 19-20 世紀ヨーロッパの政治・社会と大衆文化に関する発表が行われた。第九回は 2022 年 1 月 29 日（土）に郷司泰仁氏により「村山、朝日と展覧会」と題し、朝日新聞創業者で芸術文化に多大な貢献を果たした村山龍平とその展覧会事業に関する発表が行われた。第十回は 2022 年 3 月 12 日（土）にイリナ・ホルカ氏により、「明治後期におけるメディアの中の「モデル」：倫理・表象・職業」と題し、近代日本の文学と美術という異なる領域において、作品創造や実査の製作におけるモデルにまつわる様々な問題に関する発表が行われた。いずれの研究会においても、発表後に芸術と社会に関する活発な議論が交わされた。

6. 本年度の研究実施内容

- 2021-04-10 アウラの嘘と夢：W.ベンヤミンの『複製技術時代の芸術作品』をめぐって
発表者 高階秀爾 大原美術館
- 2021-05-29 「捨てられたもの」の芸術について 発表者 藤原辰史
- 2021-06-27 近代京都の歴史画家・谷口香嶌について 発表者 藤本真名美 和歌山県立近代美術館
- 2021-07-24 東京・京都 戦時下の前衛画家について 東京の前衛画家たちの活動について
発表者 弘中智子 板橋区立美術館 京都の前衛画家たちの活動について 発表者 清水智世
京都文化博物館
- 2021-09-11 京都美術工芸界を支えた人びと：ノードとしての品川弥二郎 発表者 池田さ
なえ 大手前大学
- 2021-10-16 杉浦非水論：大正から昭和初期の発言と作品をもとに 発表者 竹内幸絵 同
志社大学
- 2021-11-13 社会を写す近代の刺繡：作品から見る刺繡の新たなる展開 発表者 松原史
北野天満宮 北野文化研究所
- 2021-12-18 オペレッタにおける社会諷刺：ハプスブルク帝国期から戦間期の作品をみる
発表者 小川佐和子 北海道大学
- 2022-01-29 村山、朝日と展覧会 発表者 郷司泰仁 香雪美術館
- 2022-03-12 明治後期におけるメディアの中の「モデル」：倫理・表象・職業 発表者 イ
リナ・ホルカ 東京大学

7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内

高階絵里加、岡田暁生、小関隆、高木博志、立木康介、福家崇洋、藤原辰史、森本淳生、
藤井俊之、藤野志織

学外

池田さなえ(大手前大学総合文化学部)、花田史彦(立命館大学産業社会学部)、有賀茜(京
都府京都文化博物館)、植田憲司(京都府京都文化博物館)、植田彩芳子(京都府京都文化博
物館)、大久保恭子(京都橘大学発達教育学部)、大原由佳子(滋賀県立美術館)、小川佐和
子(北海道大学大学院文学研究院)、國賀由美子(大谷大学文学部)、久保豊(富山大学)、郷
司泰仁(香雪美術館)、小嶋ひろみ((公益財団法人)両備文化振興財団 夢二郷土美術
館)、実方葉子(泉屋博古館)、柴田就平(笠岡市竹喬美術館)、清水智世(京都府京都文化博
物館)、鈴木千栄子(毎日放送)、孝岡睦子(大原美術館)、高階秀爾(大原美術館)、竹内幸
絵(同志社大学)、竹嶋康平(泉屋博古館)、多田羅多起子(広島大学大学院人間社会科学研

究科／教育学部 造形芸術系コース)、永井隆則(京都工芸繊維大学 デザイン・建築学系)、中野慎之(文化庁文化財第一課文部科学)、林洋子(文化庁)、藤本真名美(和歌山県立近代美術館)、古田理子(高島屋史料館)、イリナ・ホルカ(東京大学大学院総合文化研究科国際日本教育研究機構)、松原史(北野天満宮北野文化研究所)、三宅拓也(京都工芸繊維大学デザイン・建築学系)、宮下規久朗(神戸大学大学院人文学研究科)、森光彦(京都市学校歴史博物館)、山口真有香(滋賀県立美術館)、山田真規子(目黒区美術館)、VOLK, Alicia (アリサ・ヴォルク) (University of Maryland (メリーランド大学))、河本真理(日本女子大学)、久保昭博(関西学院大学)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数				延べ人数				大学院生	
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)		
学内(法人内)	1	12	0	2	2	0	30	0	7	7	0
		(3)	(0)	(2)	(2)	(0)	(17)	(0)	(7)	(7)	(0)
国立大学	6	8	0	2	2	0	33	0	9	9	0
		(3)	(0)	(1)	(1)	(0)	(14)	(0)	(6)	(6)	(0)
公立大学	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
私立大学	7	7	0	2	2	0	34	0	13	13	0
		(5)	(0)	(1)	(1)	(0)	(23)	(0)	(3)	(3)	(0)
大学共同利用機関法人	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
独立行政法人等公的研究機関	12	16	0	7	3	0	35	0	16	9	0
		(11)	(0)	(5)	(3)	(0)	(29)	(0)	(13)	(9)	(0)
民間機関	11	13	0	4	1	0	50	0	8	6	0
		(8)	(0)	(4)	(1)	(0)	(32)	(0)	(7)	(6)	(0)
外国機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
その他 ※	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
計	37	56	0	17	10	0	182	0	53	44	0
		(30)	(0)	(13)	(8)	(0)	(115)	(0)	(36)	(31)	(0)

※「その他」の区分受入がある場合
具体的な所属等名称を記載:例) 高校教員
無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数		うち国際学術誌掲載論文数
	①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	3	0	0
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0	0	0
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	30	5	5
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0	0	0
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0	0	0

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適當ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
史学雑誌	1	R3. 10	仏教教団の「近代化」における門信徒の経済的役割—明治期・西本願寺「有力門徒」による会社設立	池田さんえ
文化財レポート	1	R4. 3	色のある写真、占領期の京都の風景	植田憲司
戦後京都の「色」はアメリカにあつた! : カラー写真が描く《オキュパイド・ジャパン》とその後	1	R3. 7	占領期のカラー写真の可能性	植田憲司
小早川秋聲 旅する画家の鎮魂歌	1	R3. 8	小早川秋聲 その画業と作品	植田彩芳子

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
美術フォーラム 21	1	R3. 12	小早川秋聲《國之楯》考—聖者として戦死者を描く	植田彩芳子
紫明	1	R4. 3	人と作品 小早川秋聲—《長崎へ航く》考—	植田彩芳子
ユリイカ	1	R3. 5	アンリ・マティスのエクリチュール	大久保恭子
arts/	1	R4. 3	「プリミティヴィズム」の現在—美術史学の方法論をめぐって	大久保恭子
2021年度特別展 東本願寺と京都画壇	1	R3. 11	東本願寺と京都画壇	國賀由美子
須田記念 視覚の現場	1	R3. 8	文化を繋ぐ：地元に残された湖北のスケッチ—竹内栖鳳と長浜	國賀由美子
Japanese Visual Media: Politicizing the Screen	1	R3. 7	Fading away from the Screen: Cinematic Responses to Queer Ageing in Contemporary Japanese Cinema	Yutaka Kubo
禅文化	1	R3. 7	表紙解説 富士山図 貫名海屋筆	郷司泰仁
天文文化学序説 分野横断的にみる歴史と科学	1	R3. 12	愛染明王と星宿—香雪美術館蔵「愛染曼荼羅図」について	郷司泰仁
竹久夢二研究	1	R4. 3	竹久夢二《西海岸の裸婦》についての試論—近代社会と絵画—	高階絵里加
杉浦非水 時代をひらくデザイン	1	R3. 7	杉浦非水が目指したもの、残したもの	竹内幸絵
ユリイカ	1	R3, 4	セザンヌの「彩る感覚」からマチスの「装飾」へ	永井隆則

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
La page d'accueil de la societe de Paul Cezanne	1	R3. 7	Cezanne's Arcadia— Provence	Takanori Nagai
学術報告書 (Bulletin of Kyoto Institute of Technology)	1	R4. 2	L'idée de l'anti- modernisation sociale chez Cézanne	永井隆則
歴史を旅する 谷口香嶠	1	R3. 10	谷口香嶠作品にみる先進性— 絵画と工芸の交錯—	藤本真名 美
Translation Studies: Retrospectiv e and Prospective Views	1	R3. 12	Minor Exchanges: Romanian Anthologies of Translated Japanese Poetry Published during the Last Decades of the Communist Regime	Irina Holca
Japanese Studies	1	R3. 12	Sawako Nakayasu Eats Sagawa Chika: Translation, Poetry, and (Post)Modernism	Irina Holca
ZINBUN	1	R4. 3	Real Animals and Where to Find Them: in the Works of Shimazaki Tōson and Shiga Naoya	Irina Holca
人文学報	1	R3. 5	関西日仏学館と女性たち—九 条山時代（1927-36）におけ る女子部の活動を中心に	藤野志織
フランス語フ ランス文学研 究	1	R3. 8	アンドレ・ブルトンにおける ドキュメントの問い合わせ：「あり のまま」の記述についての一 考察	藤野志織

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
京都メディア 史研究年報	1	R3. 4	戦争社会学が拓く戦後映画史 の新地平——山本昭宏編『近 頃なぜか岡本喜八——反戦の 技法、娯楽の思想』	花田史彦
人文学報	1	R3. 5	民間学を継承する	花田史彦
運動としての 大衆文化—— 協働・ファ ン・文化工作	1	R3. 9	観客・丸山眞男	花田史彦
学術の動向	1	R3. 12	美術とパンデミック	宮下規久 朗
ボイスオーバ ー 回って遊 ぶ声	1	R3. 11	日本美術院と滋賀	山口真有 香
野口謙蔵生誕 120 年展	1	R3. 12	野口謙蔵と周辺の人々	山口真有 香

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

次年度も引き続き、芸術と社会について様々な領域から多角的に考えるための研究会の開催を年間 10 回程度予定している。内容としては、明治から大正期の芸術と社会、マティエール（素材）と社会、印象派とユートピア、戦間期の美術展覧会、パンデミックと美術、日欧芸術交流、1930 年代の美術政策と政治性、シュールレアリズムと社会、等に関する発表を行う予定である。

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

今後の展望としては、次年度も引き続き、歴史、文学、美術、演劇、メディアと多岐にわたる研究領域を専門とする班員が「芸術と社会」という共通テーマにもとづく発表と活発な議論により視野を広げ、新たな問題意識を発見する場となる研究会の開催をめざす。コロナ禍により研究班の開始が半年遅れたこともあり、まだ発表を行っていない班員も複数いることから、1年延長の可能性も検討する。次年度はいまのところ研究成果公表の予定はない。